

# T A O G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎安藤哲朗 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

## あづまはや

### の分析

古田 武彦

(一) 今まで◎をⒶに結んで理解してきました。弟橘姫の入水に対して「あづまはや」と歎いたというので

す。

(二) しかし、この理解は、大きな矛盾をふくんでいます。なぜなら、

Ⓑの部分がかく前後と脈絡がなく

「浮き上がって」しまふからです。

(三) しかも、それは全て無目的の「動物殺し」、いわば、あの「矢

鳴」以上の残酷さです。

(四) そのような残酷譚のあと、いきなり自分の妻だけにロマンチック

くもしくはセンチメンタルになる、

というのは、いかにもグロテスクかつ

身勝手です。

(五) これに対するわたしの新しい

分析は次のようです。

①坂の神は「白鹿」に化身した点

からも分かるように、女神であった

②これをあやまって殺してしまっ

たのは、男神であった。

③「坂の神」はしばしば道祖神の

一つとして扱われる。それは「男女

一对の神」であることが多い。

④この女神は男神と「夫婦神」で

あった。

⑤女神は死ぬと同時に「白鹿」か

ら、本来の姿へとみるみる変身した

⑥男神は「白鹿」かと思っただのが

Ⓐ それより入り幸でまして、走水の海を渡りたまひし時、その渡の神浪を

興して、船を廻らして得進み渡りたまはざりき。ここにその後、名は弟

橘比賣命白したまひしく、「妾、御子に易りて海の中に入らむ。御子

は遣はさえし政を遂げて覆突したまふべし。」とまをして、海に入りた

まはむとする時に、菅八重、皮骨八重、繩八重を波の上に敷きて、

その上に下りましき。ここにその暴浪自ら伏きて、御船得進みき。こ

こにその後歌ひたまひしく、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君は

も(三)

とうたひたまひき。故、七日の後、その後の御櫛海邊に依りき。すなは

ちその櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

Ⓑ それより入り幸でまして、悉に荒ぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶ

る神等を平和して、還り上り幸でます時、足柄の坂本に到りて、御糧食

す處に、その坂の神、白き鹿に化りて來立ちき。ここにすなはちその昨

124 ひ遣したまひし蒜の片端をもちて、待ち打ちたまへば、その目に中りて

すなはち打ち殺したまひき。故、その坂に登り立ちて、三たび歎かして、

「吾妻はや。」と詔りたまひき。故、その國を號けて阿豆麻と謂ふ。

すなはちその國より越えて、甲斐に出でまして、酒折宮に坐しし時、歌

ひたまひしく、

(岩波文庫本「古事記」の当該部分)





自分の妻だったことに気づき、がく  
ぜんとした。最愛の妻であった。  
⑦そこで坂の上に登り「あづまは  
や」と三たび歎いたが、もはや妻は  
帰ってこない。

⑧古代人にとって「動物を殺す」  
ことは許されていた。しかしそれは  
「食べるため」「卜いにする(骨を)  
ため」といった、実際の必要ある場  
合に限られる。「無目的の動物殺し」  
はもっとも戒むべき行為だった。

⑨そのタブーを犯したため、最愛  
の妻を生涯失う、というとりかえし  
のつかぬ罰をこの男神は受けること  
となった、という「古代人の倫理」  
が語られている。

⑩この女神の名は「大ヒルメ貴  
(ムチ)命」である。

⑪「ヒルで目を打って殺す」とい  
う実際上ありえないような殺し方は  
「ヒルメ」という神名説話の形にな  
っていたからである。「故、大ヒル  
メ貴(ムチ)命と呼ぶなり。」とい  
った結び言葉が、本来存在したと思  
われる。(「あづま」という地名説  
話と共に。)

⑫男神は「ヒルコ大神」である。  
「ヒルコとヒルメ」これが男女神の  
名である。

⑬「ヒ」は太陽、「ヒル」は「太  
陽が輝く」意。この両者は、古き太  
陽神として、光り輝く存在であった

⑭古事記・日本書紀が「国生み神  
話」で「ヒルコ」を不具者扱いした  
のは、この「先代の太陽神の文明圏」  
を「否定」するために「作られた」  
からである。

⑮のみならず健康な古代倫理と夫  
婦愛を歌った「ヒルコ・ヒルメ神話」  
の主語を「とりかえ」て、グロテス  
クな「動物殺しの英雄」へと古事記  
は「盗用」「盗作」を行った。

⑯日本書紀で「天照大神」大ヒル  
メ貴」の等式を描いているのは、古  
い太陽信仰を、新しい「天照信仰」  
へと「おきかえる」ためであった。  
(「アマテル大神」はニニギの祖母)  
ヒルメは縄文の誇りやかな太陽神」  
であり、「アマテル」は弥生の女性

権力者である。

⑰関東・東海には「大ヒルメ貴命」  
「ヒルコ大神」の祭神が分布してい  
る。

⑱同じく当地域に「天照大神」や  
「日本武尊」を祭神とする神社が多  
いのは、「ヒルメ」天照大神」「ヒ  
ルコ」日本武尊」という「神名等式」  
による「神名転換」と思われる。

以上の論証は、近刊の『近代法の  
論理と宗教の運命』(仮題)明石書  
店刊に所収。

以上

足柄峠の現地を踏み、東京湾、浦  
賀水道方面が見えるか見えないか確  
認するだけ、と思っただけだったので  
が、思いがけぬ大収穫となりました。

(六月四日)

◇付記

左の各神社それぞれ逐次御確認願  
えれば幸いです。(伝承など)

関東・東海(静岡県・愛知県)  
祭神・大日靈(貴)命(オオヒルメ  
ムチ)ノミコト) 《天照意保比留  
売貴・表記含む》

神明宮(茨城県東茨城郡大洗町成田  
町)  
藤岡神社(栃木県下都賀郡藤岡町)  
八雲神社(栃木県芳賀郡芳賀町稲毛  
田)  
富士嶽神社(群馬県館林市小桑原)

神明宮(群馬県藤岡市栗須)

神明宮(群馬県新田郡藪塚本町大原)

神明宮(群馬県山田郡大間々町大間  
々々)

八幡神社(埼玉県熊谷市三ヶ尻字八  
幡)

建市神社(千葉県市原郡三和町武士)

《市原市武士》

五所神社(千葉県山武郡蓮沼村殿台)

神明宮(東京都北多摩郡小平町小川)

《東京都小平市小川》

杉山神社(横浜市港北区八朔町)

《緑区西八朔町》

有鹿神社(神奈川県高座郡海老名町  
上郷) 《神奈川県海老名市上郷》

有玉神社(静岡県浜松市有玉南町)

◇

神明神社(愛知県安城市高柳町中敷)

神明神社(愛知県蒲郡市三谷町須田)

神明宮(愛知県碧海郡高岡町堤)

《豊田市堤町》

祭神・姪児命 《姪子大神表記含む》

西宮神社(栃木県足利市西宮町)

八幡宮(神奈川県横浜市金沢区富岡  
町) 《横浜市金沢区富岡東》

足环神社(静岡県静岡市足久保奥組  
二〇〇七)

《『神社名鑑』による》

(なお、◇内住所は現在の住居  
表示を編集部で付加したものです)



江戸城内の荒廃と「トウ」

浦和市 高田 かつ子

【おしらせ】  
休暇村ツアー

古田先生お引越しの日の六月九日、在京最後の先生のお話を伺うべく総勢七名、荷物の運び出された先生宅を訪れた。

その時江戸城内から遷されたものがあと二つあり、その一つが今日先生が行かれた所ではないかとおっしゃる。記録によればそれは築土八幡と平川天神ということになっている。

唐書と新唐書の矛盾も解けないという話を語られた。そして足摺の唐人岩の話になった。和歌山の新宮市に「おとう祭」というのがあり、巨大な岩を御神体として「おとう」と呼んでいるそうである。一方関東に広がるオビシヤには必ずお頭渡しというものがあり、なかには新しくお頭になった人が、人型に紙を切って「神」と書いたものを背中に差し込んで家に持って帰るという姿も萩原法子さんのスライドで拝見した。唐人の「とう」は頭屋の「とう」ではないか。「人」は「神」。前からそうではないかと思

テーマ「邪馬台国」はここだった  
10/9(土)一泊二日  
博多駅集合・解散、宿泊は休暇村・志賀島、会費一六、八〇〇円。申し込みは「多元的古代」研究会九州まで

その日、先生は伝通院の沢蔵司稱荷へいらしたとのこと。そして二・三日前に訪れた日吉神社のことから話を始められた。東日流外三郡誌に秋田孝季が田沼意次に呼ばれて江戸城に赴いた時の記述があり、城内に祠のあることを知っている孝季が

明治維新後、その祠は除かれてしまった。今どうなっているか。日吉神社の権弥宣さんの話によると、日吉神社には持ってきていない、神社の慣習として木なら焼くが石なら埋めるものだという事なので、今皇居内の紅葉山書陵部の近くを探せば、埋められた痕跡がみつかるだろうとおっしゃる。それは今後私達に課せられた問題として心にとどめた。

「現場取材、信濃の古代遺跡は語る」片岡正人著、戸沢充則監修、新泉社。二、五七五円  
実にのびのびと書かれた楽しい本だ。類書は多いが一味ちがう。監修者の戸沢充則氏も「まずわかりやすく面白い。そのうえ学問的記述としても事実や資料に対して忠実に正確である。・・・研究者では発想で

面白い本が出た

「神護景雲」の年号と「安倍某」の名前の書かれている石を一部欠いて、津軽に早馬で運ばせたとある。だから石塔山を探せば江戸城にあった祠の欠けらが出てくるだろうとのこと。

また日吉神社にある「山王大権現」を意味するハンゲルの額の写真をご覧になったという。そこでハンゲルの成り立ちから説き起してそれはアビル文字であろうとの論証。安日彦・長髓彦が筑紫の賊ニニギに滅ぼされて「日の本」という地名を持って東の津軽に流れたことを示す「東日流」の表記の解明。新唐書に「日本はもと小国、倭に併合さる」はこのときの歴史事実を書いているとの指摘。だから東日流外三郡誌なくしては「日本」という国号の由来も、旧

引越しの慌ただしさの中、資料もなしに先生は一時間近く熱っぽく語られた。胸を膨らませた私達はその後喫茶店でお互いの考えをぶっつけ合い興奮を静めた次第である。

また著者と研究者の絶妙の対話があたかもその遺跡を残した古代の人々との対話であるかのような響きをもって読者をひきつける。」等々推奨している。わたしもこの本を片手に信濃の遺跡を歩いてみたい。皆さんもいかがですか。(富永長三)

最初、太田道灌が土地の神、大元明神を江戸城内の梅林の地に勧請し、それを江戸幕府が紅葉山に遷したという経緯があり、明暦の大火の後、時の将軍が永田町の星が岡に社殿を作り御本体をそこに遷したという、それが日吉神社であり、江戸城内には遙拝所として祠を紅葉山に残したというもので、秋田孝季はその祠を拝んだわけであるが、孝季はそれは実はアラハバキの神なんだと書いている。

また日吉神社にある「山王大権現」を意味するハンゲルの額の写真をご覧になったという。そこでハンゲルの成り立ちから説き起してそれはアビル文字であろうとの論証。安日彦・長髓彦が筑紫の賊ニニギに滅ぼされて「日の本」という地名を持って東の津軽に流れたことを示す「東日流」の表記の解明。新唐書に「日本はもと小国、倭に併合さる」はこのときの歴史事実を書いているとの指摘。だから東日流外三郡誌なくしては「日本」という国号の由来も、旧

引越しの慌ただしさの中、資料もなしに先生は一時間近く熱っぽく語られた。胸を膨らませた私達はその後喫茶店でお互いの考えをぶっつけ合い興奮を静めた次第である。

また著者と研究者の絶妙の対話があたかもその遺跡を残した古代の人々との対話であるかのような響きをもって読者をひきつける。」等々推奨している。わたしもこの本を片手に信濃の遺跡を歩いてみたい。皆さんもいかがですか。(富永長三)



# 蛸魅は日本列島縄文の神か

古田武彦氏

## 歓送会の発表

の地である沿海州は貂の本場じゃないですか。

そこで「貂」を諸橋漢和で調べてみたのです。ところが出てこない。さんざん調べて気が付きました。「てん」

「てん」というのは訓よみなのですね。音よみでは「チョウ」。「てん」は日本語だったので。「テンコ」の「コ」は「狐・コ」の「コ」であるか、東北でよく付ける接尾語の「コ」であるか、その辺はまだ分かりません。「天呉」は黒竜江沿いの言葉で「九尾の貂」がいてああいう怪物が描かれたんじゃないかと考えてみますが、沿海州の言葉を研究してみなければ何とも申せません。

「海賦」に出てくる怪物は日本海周辺の神々ではないかと考えています。

◆馬はどこから来たか  
馬の問題に入ります。東京古田会の田島さんから馬の情報はたくさんいただいているのですが、馬は「中国から来た」というのが定説だそうです。ウマという言葉も中国語の「馬・マ」に接頭語のウがついて日本語になっていることから、中国から日本へ渡ったことが窺えます。

ところが馬に関して変な話があります。多賀城跡の一万三・四千前の地層から馬の首の土偶が出てきました。どうみても馬としか見えないものです。学芸員の方も「あの頃日本には馬はいなかったはずなんですけどねえ」と首をかしげていました。

それから青森の郷土館でオシラサマの展示会があって見ましたが、男女一対で女の方はお姫様の服装、男の方は顔が馬なんです。馬に着物を着せて神様になっているわけです。郷土館の方は馬は平安時代に東海地方から入ってきた、というんですが、そんな時期に入ってきたものを神様にするでしょうかね。それに九州・近畿・東海と伝わってきた、それぞれの地で馬を神様扱いにしているところがあるなんて聞いたことがあります。

ここに面白い話があります。和田家文書に、アソベ族の後に次にやってきたのはツボケ族だったと書かれています。ツボケ族は鞆鞆の一派でベールリング海峡から北米に渡った一族ですが、故郷忘れ難く筏で鞆鞆を目指したところ、下北半島に着き、定着したとの記述があります。ツボケ族の話として六本柱の高楼の話が出てくるわけです。私これがリアルだと思えるのは、以前国引き神話か

承前、四柱論証から短里がリア

ルであり、邪馬一國博多湾岸説がリアルであり、そして二倍年暦がリアルであったという、三つの仮説が正しかったという確信を持った古田氏が、さらにその確証を得るべく二倍年暦の原産地パラオへ旅行したいきさつ、そして「暦は風土の中から生まれる。暦は一つの文明の基礎である」という名言を吐かれる。

また十数年前まであった「旧石器三万年論争」を見事に覆して六十数万年前の上高森遺跡を発掘した藤森新一さんのお話、そして「読地三百回、石、自ずから見ゆ」の新格言も生み出される。そして……

◆「天」は「貂」か  
さて、いよいよ本日朝大発見したことをお話しいたします。夢中になって調べているうちに十分も遅刻をしてしまいました。

以前「海賦」に出てくる「天呉」のお話をしましたところ、群馬にお住まいの平田さんから栃木の「九尾の狐」の史料をたくさんいただきま

した。「三本足のカラス」が千葉・茨城・東京に分布していてそれが中国に伝播したのではないかと述べましたが、「九尾の狐」もその類いではないかと思つての史料の提供だと思つたのですが。

竹原古墳の壁画にいろいろ怪物が描かれております。「天呉(てんこ)」「馬衝(ばがん)」「海童(かいどう)」「蛸像(もうぞう)」などです。それらは木華の『海賦』では倭人の航海風俗として描写されているものと見事に対応しています。(『邪馬一國の論理』所収)

「天呉」は丸い顔の回りに小さな丸い顔がぐるりと取り囲んでいて尻尾が九に分かれています。『邪馬一國の論理』を書いた時には「九尾の狐」を連想していたのですが、狐は細長い顔なのに「天呉」は丸い顔です。それでハッと気が付いたので「天・テン」は「貂・テン」ではないかと。貂は顔が丸くて尻尾がふさふさしていますね。二万年前、日本列島は大陸と陸続きでした。日本列島の歴史は肅慎から始まると申しましたが(和田家文書により)、肅慎

の地である沿海州は貂の本場じゃないですか。

そこで「貂」を諸橋漢和で調べてみたのです。ところが出てこない。さんざん調べて気が付きました。「てん」

「てん」というのは訓よみなのですね。音よみでは「チョウ」。「てん」は日本語だったので。「テンコ」の「コ」は「狐・コ」の「コ」であるか、東北でよく付ける接尾語の「コ」であるか、その辺はまだ分かりません。「天呉」は黒竜江沿いの言葉で「九尾の貂」がいてああいう怪物が描かれたんじゃないかと考えてみますが、沿海州の言葉を研究してみなければ何とも申せません。

「海賦」に出てくる怪物は日本海周辺の神々ではないかと考えています。

◆馬はどこから来たか  
馬の問題に入ります。東京古田会の田島さんから馬の情報はたくさんいただいているのですが、馬は「中国から来た」というのが定説だそうです。ウマという言葉も中国語の「馬・マ」に接頭語のウがついて日本語になっていることから、中国から日本へ渡ったことが窺えます。

ところが馬に関して変な話があります。多賀城跡の一万三・四千前の地層から馬の首の土偶が出てきました。どうみても馬としか見えないものです。学芸員の方も「あの頃日本には馬はいなかったはずなんですけどねえ」と首をかしげていました。

それから青森の郷土館でオシラサマの展示会があって見ましたが、男女一対で女の方はお姫様の服装、男の方は顔が馬なんです。馬に着物を着せて神様になっているわけです。郷土館の方は馬は平安時代に東海地方から入ってきた、というんですが、そんな時期に入ってきたものを神様にするでしょうかね。それに九州・近畿・東海と伝わってきた、それぞれの地で馬を神様扱いにしているところがあるなんて聞いたことがあります。

ここに面白い話があります。和田家文書に、アソベ族の後に次にやってきたのはツボケ族だったと書かれています。ツボケ族は鞆鞆の一派でベールリング海峡から北米に渡った一族ですが、故郷忘れ難く筏で鞆鞆を目指したところ、下北半島に着き、定着したとの記述があります。ツボケ族の話として六本柱の高楼の話が出てくるわけです。私これがリアルだと思えるのは、以前国引き神話か



ら、出雲の黒耀石が沿海州から出てくるはずだと論証しました。その後当時のソ連の学者が、ウラジオストック周辺から出た七十数点の鉄を日本に持って来て、分析してもらったところ、50%は出雲、40%赤井川の黒耀石と判明しました。赤井川というのは函館と札幌の間であって、縄文後期・晩期、津軽海峡圏で使われた黒耀石を産出しています。ツボケ族が青森に定着したとはいうものの、故郷である鞆鞆の本拠地と連絡があったことを示すものではないでしょうか。

多賀城碑の「西・去鞆鞆三千里」もそういった背景で理解できるとおもいます。

#### ◆「ガンジョ」とは

もう一つ面白い記述があります。ツボケ族が来る時、筏に馬を二十三頭乗せてきたというのです。馬は神様であった、馬は北米から来たんだということ述べているのです。オシラサマにつながる話だと思いませんか。田島さんからの情報によると、現代の常識で、世界で一番古い馬は、北米にいたのだそうです。古い馬の骨が出てきているのです。でも、その後が分からない。映画なんかで先住民族が乗って出てくる馬は、ヨー

ロッパ産の馬で北米原産の馬というのはいないんだそうです。偶然にしては符合し過ぎますね。

秋田孝季は和田家文書の中で言語表を作っています。それによるとツボケ語で馬は「ガンジョ」となっています。「ウマ」は中国語から派生した言葉、ところが東北では「ガンジョ」と呼ぶ。中国から来た馬ではないからです。「馬衝」と「ガンジョ」との関連性、これも面白すぎてちょっと恐い気がします。

#### ◆チミは日本語か？

「海童」は「海坊主」だと思えます。「蛸像（もうぞう）」は蜃気楼、蛸と同類のものです。で、これは今朝見つけたことなんです。「モウリョウ」といったら、「蛸魅モウリョウ」という言葉が浮かんできませんか。蛸魅蛸。チは山に出てくる怪物、ミは沢に出てくる怪物ということになっています。ところで日本では神を表すのに「ミ」、これは私の兄弟子である梅沢伊勢三さんが微細な大論証をしています。そしてその以前の神は「チ」です。「アシナツチ」「テナツチ」「ヤマタノヲロチ」の「チ」です。日本語の神を表す二つの言葉は「チ」と「ミ」です。

史記の五帝本紀を見ますと、舜がよい政治をやったということで、「以て蛸魅を御す」と記されています。舜以前には「蛸魅」が大暴れて御することができなかった。「蛸魅」は舜より以前に存在した、手に負えない物だったというわけです。この「蛸魅」はもしかしたら日本語ではなかったかと思いつたわけです。

縄文文化が日本から中国に伝わったことは以前論証しました。縄文人が土器だけ持って行ったわけではありませんが、言葉も風習も紙も持って行ったと考えるのが自然です。日本の紙、「チミ」が、中国の風土になじまない異端者として中国人の目に映っていたことが想像されます。因みに「御す」とは滅ぼすまでいかな、猖獗を極めていたのを制圧してやっと新しい文明領域の一環に収まるようになった、という意味なのです。

#### ◆シュリーマンの見落とし

今、シュリーマンの書いた物を読もうと集めています。今、読み始めた感じで申すのですが、シュリーマンはトロヤとギリシアの戦争には関心があったが、それ以前のアマツォーネとトロヤとの戦いには無関心だったようです。

しかしホメロスによれば、アマツ

ォーネとの戦いが、トロヤのもっとも重要な戦いであったと思われます。

トルコの本来の文明は女性中心の黒耀石の文明であったと思われる。そしてトロヤは恐らく侵略者であったでしょう。私が気が付くくらいだからシュリーマンも当然読んでいるはずで、現に彼の著書のミケーネの部分に、黒耀石の記事や写真が、ごく少し出てくるのですが、全体としてはないといって良い。どうも彼は黄金に主な関心があって、黒耀石には余り関心がなかったように見えます。

最近、トロヤの遺跡から、戦いの最中に火災が起って焼け死んだものらしい三、四〇人の遺体が出てきました。その様子はホメロスの叙したアマツォーネ・トロヤの戦争の有様とよく合うのです。

トルコの現地の博物館には、儀式用に使ったと見られる巨大な黒耀石の鎌などが陳列されています。最近そちらに調査にいかれた学者に、それらの原産地を調べてくれるように頼みました。それによってアマツォーネの起源に迫れるわけで、楽しみにしています。

(まとめ・高田かつ子)



# 虎塚古墳の発掘について

鴨志田 篤二氏講演

ひたちなか市埋蔵文化財センターの研究員というより、あの壁画古墳・虎塚の発掘者である、鴨志田篤二氏が多元の懇談と発表の会に講演された。

「虎塚を見学に来られる人たちにもいろいろありまして、中には酩酊して観光気分で来る方もある。我々はそのれどもちゃんと説明申し上げるのですが、自然、松竹梅・鶴亀のラックができます。皆さんが来て下さったら松の特級で説明します」と笑わせる。

スライドを映しながら四時間余の講演であった。以下はその一部。

## ◆ひたちなか市

茨城県と考古学は縁の深い所です。まず植物分布なども北方の特徴と南方の特徴が交差しています。人文学的にも北方文化と南方文化が交差する土地としてみると良く分かることがあります。

茨城県が誇るものに常陸国風土記があります。皆さんも詳しいと思いますが、五風土記の中でも良く残っ

ていて、美文で立派なものです。常陸は土地が肥えていて一生懸命働けば豊かな収穫がある、と誇らしく書かれています。

古いものでは大串貝塚があります。これはご存じのように常陸国風土記に記録されています、巨人が食べて積んだものだとしてあります。

貝塚は古代人のごみ捨て場と一般に言われていますが、私はそうは思いません。大体わが国は火山灰の堆積が多く、土地が酸性で貝殻や骨が溶けてしまっていて残りません。たまたまアルカリ性の場所に貝が堆積したものが貝塚になる、というのが私の見解です。

## ◆文化の接点

北の県境には那須国造碑があります。皆さん良くご存じと思いますが、これも北の文化と南の文化の接点という意味があると思います。

ひたちなか市は旧勝田市が母体になっていますが、これが一九四〇年に武田町と勝山町が合併してできたのです。この武田町は江戸幕府がで

きた当時、甲斐の武田氏の生き残りを集めて武田氏の名跡を継ごうとして立てたところで、武田の武士たちが住んでいた所です。

考古学と水戸藩とはもう一つ繋がりがあります。待塚古墳がそれで、水戸の老公（光圀）が上下侍塚を発掘調査したのですが、はっきりした目的を持って考古学遺物を調査したのは、世界的に見てもこのときが初めてです。しかもその後の処置、記録、埋葬者への敬意の表し方、どれを見ても現在の考古学者が模範にすべき立派なものでした。

## ◆虎塚との縁

よく「どこの学校を出たか」と聞かれて返答に困るのですが、私は機械工学科の出身でして、卒論のテーマが歯車でした。日立製作所に勤めて技術系の仕事をしていたのですが、元来この方面に関心があったのと、たまたま姉の嫁ぎ先が虎塚古墳の地主だった関係で、突然考古学に方向転換して今に至っています。同窓会などでよく揶揄われますがね。

昭和四〇〜四八年頃、虎塚を発掘する計画が始まり、その手順が検討されました。古代遺跡を発掘するということは、それまで続いていたも

のを壊してしまう、ということでもあります。そのため慎重な事前調査を行いました。まず密生している樹木を伐採し、下草を刈り、全体の地形が見えてきたところで測量、等高線を書いて図面を作ります。予備的な発掘をしたところ、幸いなことに西側に羨道の入口が見えてきました。

## ◆高松塚を反面教師として

そのころ、あの有名な奈良県飛鳥村の高松塚古墳の発掘が行われました。立派な壁画が出たのですが、予期しなかったことで東京国立文化財研究所の先生方が行ったときには外気の影響で剥落寸前になってしまっただ。古墳の中の発掘以前の温度・湿度の基本的なデータが無く、どのよう保存したらいいかわからなかったからです。後の話ですが、虎塚の時にはこの成果と失敗を全面的に参考にさせてもらいました。

その後国立文化財研究所から横穴式古墳のこれから開ける所があったら知らせてくれと言ってきました。温度・湿度のデータを取るためです。さっそく虎塚を開ける前に来ていただきまして、細い穴から釣りの継竿にセンサーをつけて中のデータを取りました。95%15℃、これが、後で



分かったことですが一年中ほとんど変わらないのです。

その時に壁画があることも分かり、保存のために万全の準備をして開けることになりました。全国で壁画古墳は多いのですが、最初から意図的に発掘したのは虎塚が最初です。

その後、羨道を塞いでいた大石をどけたのですが、マスコミが大勢来まして、開けた途端に雪崩れ込もうとするのを手を広げてで食い止めました。考古学者は時に腕力が必要です。各社一分づつ割り当てて写真を取ってもらい、その後厳しく出入りを制限しました。

◆壁画の特徴

壁画は凝灰岩の上に白粘土を一面に塗った上に描かれています。この白粘土は焼失した法隆寺の壁画でも使われていたものです。

画は円、環、剣の形、三角を組合わせた形、等がありますが、出土遺物との関係ではっきりしているのは靫でして、埴輪の靫(古墳時代)は鉄が上を向いています。奈良時代を過ぎると鉄は下向きになります。顔料は赤いのはベンガラ、酸化鉄です。その他にもいろいろ使われていますが、千年以上もっているのは大し

たものです。現在使われている絵具はどうして千年もたせることはできないでしょう。

虎塚古墳は今でも嚴重に管理されています。毎年のある時期に公開されるほかは、私でも年に一回ぐらしか入れません。そのときは全身くまなく消毒されるほかに、私は下戸ですが前の晩に酒を飲んで体の中まで滅菌します。冗談でなく、そのくらい厳しくしても人間が中に入りますと細菌やかびが増えます。そのためセンサーが設置されていて、絶えずチェックしているので分かるのです。

◆古代遺物の運命

今全国で毎年一万件の遺跡が調査されていますが、その中で保存されるのは二、三件だといわれています。他は破壊されるか埋められてしまうので、僅かにいろいろな条件が揃ったものだけが保存されるのです。その中で私が遺跡発掘に従事して掘った遺跡のいくつかが保存されていることは幸福なことだと思っています。まして全国に名の知られた古墳の調査発掘に関係できたことは、稀に見る幸福というべきでしょう。

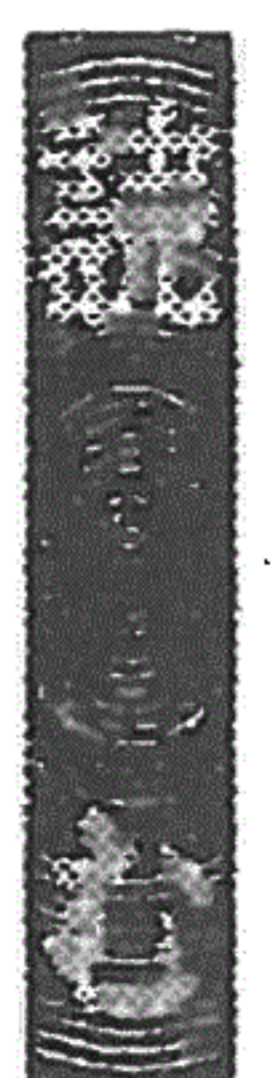
◆埴輪工房の出土

茨城県の古墳時代は、また埴輪の出土の豊かなところですよ。とくにこの地域の埴輪は装飾品や衣服・顔の化粧など、見ているだけで楽しいものが多いのですが、ある団地の予定地から埴輪を焼くための登り窯の遺跡が中学生のグループが見つけた。発掘の際一部を破壊したりしましたが、そのため全容が判明し、保存することができました。気がつかなければ工事が進行して分からないままになったことでしょう。

この登り窯は三基あって、そのうち二基が同時に使用されていたようですが、単に窯だけでなく、職人が作業をした場所、焼き損じを捨てた場所、生活の跡などが総合的に出てきた珍しい遺跡であることが分かりました。発見者と研究機関とが密接に連絡して動くことがつくづく大切なことです。

(文責・編集部)

青木 始氏より、前後数回書籍の寄贈がありました。(古田先生の絶版のものなど)そのつど希望者に頒布させて頂きました



山内玲子著『実在したイナ王国』  
古代銅鐸王国、イナツヒコが君臨していたといわれる国家を著者が「イナ王国」となづけ、遺跡・文献・伝承の面から徹底的に後付けを行った、読み応えのある小冊子。A5判、頁 頒価千円。申込みは〒300 茨木市若園二〇 藤田友治氏まで。

『解説された聖書とイエスの謎』  
斎藤 忠著 日本文芸社刊、ハードカバー千三百円。

著者のコメント「この本は古田的論証の元に生まれ、キリストがイエス以外にもいて、その活動を記す福音書がかつてあり、やがてイエスだけがキリストとする派が勝ち、現行の新約聖書が作られた……」

◎訂正

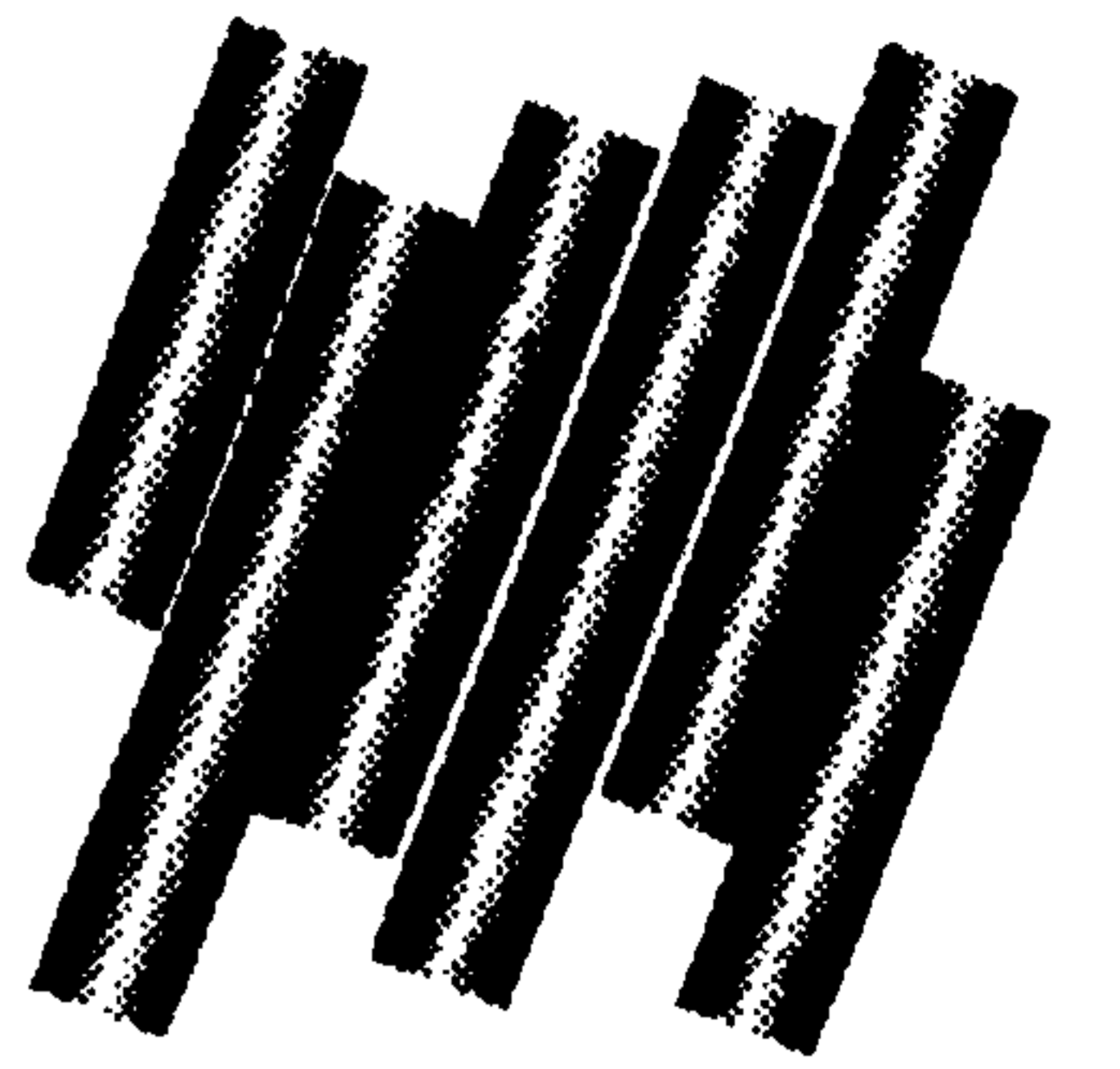
前号「高橋氏系図と九州年号」

(平野雅曠氏)に誤字がありましたので、お詫び・訂正いたします。

四頁三段一五行、誤「春の学を勅賜」↓正「春の字を勅賜」

四頁四段二〇行、誤「天智天皇」↓正「天智元年」





山田宗睦

# 日本書紀講座

第一八回

## アマノウズメに憑いたのは誰か

第七段の本文の続き。天石窟に入ってしまったアマテラスを引き出そうとして、その前に立つアマノウズメを巡る話題が中心である。高天原神話の最も有名な箇所であろう。しかし、ここのところは、分からないことが多い。まず、①アマノウズメとは何者か？②神であるアマノウズメが神がかりするが、憑いた神は一体、何なのか？③アマテラスは自分が石窟に籠もったために豊葦原中国は夜が続いているというが、高天原の夜ではないか？④明らかに新しい氏族である中臣、忌部に対し、中臣神、忌部神といった表現をしているのは、何故か？

③、④は書紀の作者の筆がすべったとしかいいようがないが、本当にそれでよいのだろうか？アマノウズメはサルメノキミの遠祖とあるが、ヒルメーヒルコに対応してサルタヒコーサルメという、一対の男女神で

はないかと思われる。しかし、サルメの参考文献は平安期のもので、直ちには信用できない。なぜ、アマノウズメがサルメと結び着くのか、しつくり来ない。また、アマノウズメはホコを持って石窟の前に立つのも変だ。鏡なら分かる、アマテラスは日の神だから。

そして、アマノウズメは神がかりする。神に憑く神、憑いた神とは何なのか？これを問題にした人はいない。先にイザナキ、イザナミの場合にもイザナミが天神に相談する場面があった。最高神の上はまだ神が存在するという構造である。アマテラスはアマノウズメに取りついた神の声を聞いたのである。六世紀半ばまでしか遡れない、中臣氏、忌部氏の高天原への登場は高天原そのものが新しい概念であることを示唆する。天石窟の話は相当広い範囲に存在する冬至神話に高天原がくっついたも

のといえる。スサノヲは多くの罪を負わされ、損害賠償で身ぐるみはがれて高天原から追放される。

第七段の第一の一書はアマテラスが天石窟に入り、八十万の神々がその対応に苦慮するという史料である。アマテラスが死ぬと困るので、ワカヒルメという死んでも構わない、新たな神を登場させていること、神々が集うのが天高市という飛鳥近くと考えられる場所であること、凶象を作ってアマテラスを外へ誘い出そうとすること、こうした作業の中心に紀伊国の日前神がいること、などが注目される。これらは七世紀の終り頃の現実に見合っていると考えられる。凶象は仏教伝来以降の新しい現象であり、日前神も紀氏の中央進出を反映するものであろう。結局、第一の一書は紀氏が祖神を祭るために、その中央への登場の所以を挿入させたと思われる。その内容は七世紀的で、見かけよりずっと新しいのである。

\*\*\*\*\*

高天原の呪術とフレイザー「金枝篇」のそれとがほぼ同じ、という話には驚いた。神話も世界的な視点から、もっと掘り下げてみなければ、と思った次第。

(木村由紀雄)

# 新・古代学



「新・古代学」発行のお知らせ

このたび「新・古代学」第2集の制作が完了、発売の運びになりました。ご入用の方は\*高田かつ子(048-1881-9111、11366 浦和市南浦和3-19-12303)まで申し込み下さい。

頒価は会合などで直接手渡しの場合、一八〇〇円、郵送の場合送料とも、二〇六〇円です。郵送の場合、

▼(振込先)「多元的古代」研究会  
・関東▼口座番号00170・9・768777にお振込み下さい。

▼内容の概要：  
北村泰一・「タクラマカン砂漠の幻の海」北村泰一／古田武彦 対談  
「地球物理学と古代史」  
特集・和田家文書の検証 古田武彦  
「和田家文書の中の新発見」「和田家文書筆跡の研究」ほか  
古田史学の検証・古田武彦「遠方より来る」・張偉「西王母関係論文二点」ほか



# 上総の遺跡を歩く

浦和市 神部 基

## 万葉集と漢文を読む会

去る五月十八日、「上総の遺跡を歩く会」に参加した。小湊鉄道の上方総村上駅に集合したメンバーは、紅一点を含む総員十二名であった。

午前九時半、全国屈指の規模を誇る上総国分寺跡に向って出発。まず戸隠神社の小高い境内の裾を半周。

やがて神門瓦窯跡を右側に眺め、続いて神門五号墳の麓に差し掛かり、早や古代史跡群の雰囲気を感じず。

この墳丘は神門古墳群の中で最古で、三世紀中葉のもの。所在する広大な「国分寺台」地域での早期の先進的盟主の墓と見られている。

場所は既に目指す国指定の「上総国分寺跡」地に接し、道路を隔てて地面一帯が壇状に土盛りされて広がっている。その西辺に沿って北進すると短い模擬木柱が八本埋められている。これが国分寺西門跡である。

その先の現在の参道から国分寺跡地内に入り、現存する薬師堂に詣る。この堂は江戸時代の中期、上総国分寺の再建を願って僧快應と村人たちの協力で建立したという。

さて、約一二五〇年前の天平時代、僧寺・尼寺の構成で創建された国分寺のここは僧寺の跡。その象徴が塔

であった。その造りは七重で、高さ六十三桁を超え、跡地東隣りにある市原市庁舎より高く、法隆寺五重塔の二倍近くもあったという。現在は薬師堂と道を隔てて南側に心礎だけが残っている。

その市庁舎の更に東側が尼寺の跡。その一隅に僧寺・尼寺それぞれの遺跡からの主な出土物の展示館があり、ハイテクによる映像と音声や館員による説明も受けることができた。

時間は既に午前十一時半を回り、昼食後、尼寺の北東数百米に当る稲荷台一号墳記念広場を訪ねた。ここにあった円墳は「王賜」銘の鉄剣の出土で名高いが、古墳そのものは残し得ず、三分の一の大きさの模型が隣地に作られ、小広場になっていた。

更に数百桁北東進して市原市埋蔵文化財調査センターを見学。ここには同市内で出土した旧石器時代からのめずらしい遺物が見られたが、右の「王賜」銘の鉄剣はレプリカで、実物は佐倉市にある国立歴史民族博物館に保管委託しているとのことであった。

天候にも恵まれ、午後三時ころ、予定のコースが終り、現地解散した。

つくづく万葉集は難しい歌集である。分かったつもりでも、一見何の疑問もないと感じていた歌が、見直してみるとどうしようもなく解釈のどうどうめぐりに入ってしまう。

その点は立派な注釈書を出している専門家でも同様と見えて、われわれが分からない歌は巧妙に避けて、さらっと流している。そういうことが分かるのが、この会合のいいところである。

そんな調子でかかるから、一日に手掛けられるのは一首か二首、しかしそれを何とかこなすためには、全万葉集を読むことが必要になることもある。

3505 うち日さつ みやのせ川のかほ花の 恋ひてか寝らむ 昨夜も今宵も

3457 うち日さす 宮のわが背はやまと女の 膝枕くことに我を忘らすな

うち日さつ、は、うち日さす、の訛り、宮、都にかかる枕詞とされている。仙覚抄に「スベロキノ宮ノ内ハ、タカキモノナレバ、日ノ光サン

入テ、内ヲ照シ給ヘバ」雄略記に「まきむくの日代の宮は朝日の日照る宮、夕日の日かける宮」とあり、

日の射す義、宮の讚へ言葉という。そこで巻3 460「内日指」の例から、宮え日が射すのではなく、宮の内から光り輝く意ではないのか、と八谷新説？がでたがどうだろうか。

3506 新室の こときに至ればはた薄き 穂にでし君が見えぬこの頃

ことき、とは蚕時、養蚕の時節とする説。そうではなく言寿（ことほぎ）とする説がある。これによれば新築の祝宴か。

1637 はた薄既尾花逆葺き黒木もち 造れる室は万代までも。

2351 新室の壁草刈りに・・・等から草葺きのももの含まれるだろう。すると神事・祭事に関わる仮屋をも考えてもよいか。ともあれその

新室と、穂に出し君との関係は？一首の解釈はどうなるのか、なかなか共通理解にいたらない。漢文は大会のためお休み。

(富永長三)



# 再び「オビシヤ」について

五月六日、再度萩原法子氏にお願  
いして、オビシヤとは何か、をうか  
がった。

今回もまた多数のスライドを交え、  
氏のご研究の一端を聞かせていただ  
いた。

前回のお話「三本足の鳥的」か  
ら、本年一月の現地調査を経て古田  
武彦氏は新しい発見をされた。その  
成果は「学問の未来」あるいは「ア  
ー」の四誌面によって皆様のお手元  
にお届けした。今回古田氏もこの例  
会に参加され、さらなる発見を得た  
ようである。

さてオビシヤは日本列島各地に伝  
存する。その名称もいろいろである。  
萩原氏の地元・市川市にはニラメッ  
コオビシヤなどと呼ばれるものもあ  
る。またオビシヤといわれながら、  
肝心の弓神事を行わないものも多い。  
ただ一定の日に集まり、会食に終始  
するものも少なくない。しかし頭屋  
渡しだけはあるようである。(頭屋  
とは輪番の、職業的でない神主のよ  
うなもの)物忌み・潔斎をしてオビ  
シヤを迎え、オビシヤが終わって初  
めて新年の挨拶を交わす、というと

ころもある。等々各地のオビシヤの  
様子をスライドを見ながらうかがっ  
た。

昨年から今年、萩原・古田両氏の  
出会いによって、私たちはオビシヤ  
という民俗行事の淵源と伝統をかい  
ま見せていただいた。萩原氏のさら  
なる探求を待ち望みたい。そして私  
たちも微力を合わせて……。

(富永長三)

## 中小路駿逸氏講演会

行われる

「人麻呂と『日本書紀』」

——古代史誕生の秘密——

の演題のもと、追手門学院大  
学教授・中小路駿逸氏の講演会  
が、七月二十七日、真夏の好天の  
もと行われた。聴衆百数十名。

「私は三十数年明石に住んでい  
ます。この明石というところは  
人麻呂と大変関係が深いのです  
……」と始められ、四時間余に  
およぶ講演であった。  
内容は次号の「多元」に掲載の  
予定。

## 鳥の出ないオビシヤ

立川市 福永 晋三

二月一日に、古田先生と高田かつ  
子さんにお供して、星宮神社(千葉  
県八日市場市吉崎)を訪れ、オビシ  
ヤ神事を見学する。神主さんの話で  
は、正月三日のお的の祭事に始まり、  
今日のオビシヤで一連の祭事が終わ  
る由。高田さんの話では、正月三日  
には鳥が出なかったため、今日のオ  
ビシヤを確認するために再訪したと  
のこと。神主さんと氏子の方々は昔  
どおりに神事を再現されたとのこと  
だが、結果から報告すると、三本足  
の鳥も出ず、射日神事らしきものも  
なかった。

祭主の神主さんと壮年の神主さん  
との二人で神事は進められた。  
まず神殿に向かって祝詞を上げ、  
氏子にお祓い。次に祭主が祝詞。稲  
の豊饒と豊漁とを祈り、打ち板の儀  
式を行い奉るとの趣旨であった。最  
神殿に拝礼し、その後、氏子一  
同が玉串奉奠。儀式の後に次のよう  
な祭礼が執り行なわれた。

### 星宮神社 御祭礼式順

御神酒 参献

次 吹物(すいもの)

次 御膳

次 燗酒 壹献

次 火繩

次 甘酒

次 煎火(せんか) 壹献

(香の物)

次 蓬萊山

次 年番渡 壹献

次 満献

※ 蓬萊山が神殿に戻り、賽コロの  
勝ち負けで一年を占い、賽銭奉納。

直会(なおかい)

「火繩」は、竹でこしらえたパイ  
プで喫煙。煎火は、いった米が紙に  
包んであった。元は亀の卵を煎った  
とか。ここで御神体は亀と知られる。

蓬萊山は、大根で亀がかたどってあ  
り、折り鶴とで鶴亀、松竹梅があし  
らってあり、下には米が撒かれてあ  
った。やはり亀が中心とのこと。

全てが終わって、氏子の方と先生  
・高田さんとの会話の中に「おとこ  
びしヤ」「おんなびしヤ」の語が聞  
き取れた。確かに今日は男衆だけの  
祭礼で女人は立ち入れないとのこと。

三本足の鳥についての問いには、全  
く覚えがないとのこと返事であった。  
ここ、星宮神社のオビシヤとは果た  
して?



# 九六年度定期大会

九六年度定期大会は六月二三日(日)文京区民センターで行われた。

提示された昨年度会計報告・今年度予算・昨年度活動報告・今年度活動予定は拍手をもって了承された。

なお今回は偶数年度につき役員改選は行われない。

1995年活動報告(九五/四〇九六/三)

九五年度は古田武彦氏特別講演会(六/四、一/一四) 中小路駿逸氏特別講演(八/二〇) 遺跡巡りの旅(青森七/二八)三〇) 各種研究会を毎月継続して開催した。また、メガーズ博士来日に当たっては講演会・座談会開催に積極的に経済的・技術的後援を行い、古田氏の定年退職関係の各種行事・記念誌「学問の未来」発行などに貢献した。

月例の「発表と懇談の会」には年間10回のうち2回、特別ゲストによる講演を聞くことができた。(一月・三月) また山田宗睦氏「日本書紀講座」七回、「万葉集と漢文を読む会」一回、古田ゼミナール五回をそれぞれ開催した。

「関東歴史散歩の会」には六月(千葉県市川市)一〇月(群馬県高

崎市)の二回開催。またオビシヤ弓神事の実地調査を広範囲に行った。

九六年四月、古田氏京都移転に伴い、有志による「古田武彦氏を送る会」を開催、出席者・特別有志の寄付によるギリシア語「プラトン全集」(全5冊)および、名入り原稿用紙一〇〇〇冊を贈呈した。

会報「多元」は隔月の六回発行、中間の月には「はがき通信」六回を会員のもとに届けた。

## 一九九六年度活動予定

四/二一古田武彦氏を送る会(既往) 六/二三定期大会(既往)

発表と懇談の会 年間一〇回開催、(第一日曜日) 外部講師二〜三回予定。

万葉集と漢文を読む会 年間一回(第四日曜日)開催。

関東史跡散歩の会 春秋各一回開催。幹事会(役員および幹事による)原

則として毎月開催。会報「T A G E N」発行(隔月) はがき通信(隔月、会報発行のない月)発行する。

また、「多元的古代」研究会・各区連合と古田史学の会・東京古田会・青森古代史の会と協力して雑誌

「新・古代学」を発行する。(7月下旬刊行予定) わが会は今回もひきつづき編集・発送その他大部分の業務を担当する。

「多元的古代」研究会・関東1995年度会計報告 (1995.4.1~1996.3.31)

収入		支出		
前期繰越金	144,676	会報発行費		
会費/入会金	1,024,000	編集費	312,917	
事業収入		印刷費	135,546	
	講演会	91,127	発送費	211,573
	遺跡旅行	262,145	仮払	70,000
書籍	32,965	ハガキ通信費など		
雑収入	16,053	ハガキ代	75,500	
前受金*1	183,000	印刷費	13,590	
		発送費	18,761	
*1 前受金は95年度中に96年度の会費等を払い込まれたものを仮に前年度会計に繰入れたもの。		友好団体交流費		
		東方史学会*2	80,750	
*2 東方史学会 メガーズ博士来日行事関係。		新・古代学仮払	30,000	
		会報交流費	23,950	
*3 仮払 主として会場費の内、年度にまたがって支出されたもの。		運営費		
		「学問の未来」寄付	52,000	
		例会補助	33,981	
		会場費	31,120	
		事務通信費	57,785	
		仮払*3	12,920	
		前受金払出	183,000	
		次期繰越金	410,573	
合計	1,753,966	合計	1,753,966	

「多元的古代」研究会・関東 1996年度予算

収入		支出	
前期繰越金	410,573	会報発行費	780,000
会費/入会金	1,030,000	ハガキ通信費	120,000
事業収入	50,000	友好団体交流費	50,000
雑収入	10,000	運営費	200,000
		予備費	350,573
合計	1,500,573	合計	1,500,573



# 事務局便り

## 越国(北陸)遺跡巡りの旅

古田武彦氏の提唱するオー・エヌ・ライ  
ン(大正元年(文武天皇)を国期とする時  
代区分)以前、北陸地方は「越の国」とい  
われていました。その後、越前・越中・越  
後(別れ、さらに後)能登・加賀の国に分  
国しています。

今回の遺跡巡りの旅は、能登・越前・加  
賀・若狭と北陸地方の遺跡を巡ります。縄  
文時代の研究に「大工ポック」を記した、鳥  
浜貝塚遺跡を中心に、真跡遺跡など縄文遺  
跡を中心に、古代より続く神社なども訪ね  
ます。詳しくは案内書を参照の上、ぜひ  
ご参加ください。

▼参加費 四万五千円(非会員四万七千円)

▼日時 九月 七日(金)～二九(日)  
▼申込 ハガキ又はファクスで事務局まで  
「**日本書紀講座**」第三年度  
山田宗睦氏の「日本書紀講座」は九月か  
ら第三年度に入ります。山田先生はすでに  
現代語訳の日本書紀(教育社新書)を刊行  
されていますが、今年からは全三〇巻の  
「日本書紀史注」(風人社刊)を刊行すべ  
く精力的に準備を進めておられます。  
講座の方は巻第一「神代上」をじっくり  
読み進めておいて、第三年度も年間八  
回の講座として継続します。引き続き多数の  
方々のご参加を希望しています。

▼会費(年間) 八千円(非会員は一万円)  
(毎回) 千五百円  
◆**新年度会費納入のお願い**  
会費の納入はお済みですか?

◆**新年度会費納入のお願い**  
会費の納入はお済みですか?

本会の年会費は「四月より翌年三月まで」  
となっております。継続会員の方でまだ平成  
八年の年会費(四千円)を払込みの済んで  
いない方は早急に郵便振替にてお振込み下  
さるようお願いいたします。

▼振込先 「多元的古代」研究会・関東  
▼口座番号 00170・9・768777  
新規のご入会を歓迎します  
「多元の会・関東」にご参加下さい  
本会は「古田武彦氏の提唱された、歴史  
を多角的に観る考え方に賛同し、それを継  
承発展させる事を理念として、日本の古代  
の真実の姿を研究」する会です。このよう  
な取組方針に賛同する方々の入会を歓迎し  
ます。本会は毎月「機関誌」や、中間月には  
ハガキ通信を発行する一方、各種の月例会  
を開催し、また年間数回は外部講師を招い  
ての講演会、遺跡調査旅行などを実施して  
おります。

▼入会ご希望の方は、住所・氏名(ふりが  
な) 電話番号(明記の上) 入会金(千円) お  
よび年会費(四千円)を左記へお振込願  
います。

▼(郵便振替) 「多元的古代」研究会関東  
▼口座番号 00170・9・768777



●何よりもまず、発行が大変遅れたことを  
お詫言します。いろいろ事情はあったので  
すが、何と言っても準備不足の一人を抱え  
込んだのが原因です。編集責任者として申  
し訳ありません。●私たちの回りにはいろ  
いろな情報が飛び交っています。近ごろの  
テレビではいたり顔の考古学解説がよく出  
てくるようになりました。それだけ一般の  
人の関心が高まっているのではないかと、そ  
れらをたちまち「邪馬台国」近畿説や大和  
朝廷二元論に結び付けて、何の反省もない  
アナウンサーの顔を見ているとやりきれな  
い感じがします。●「新・古代学」が出版  
されました。この編集にも携わったので  
すが、終わってみるとあつたは良かった、  
こつたは良かったといふ反省が一杯あ  
ります。こつたは良かったことを経て編集の  
プロになつていくのでしょうか、それを持っ  
てるのでは遅すぎる、だれか若い人で「おれ  
にまかせろ」という方がいませんか? ●今  
号は大勢の方から原稿を頂きながら、紙面  
の関係でほとんど割愛、来号以下に回さ  
るを得ませんでした。この場を借りてお詫  
言します。(近原慎誠誠恐味死謹言)



会場は全て文京区民センターです

**8月** 4日(日)午後1時  
発表と懇談の会 話題提供とテーマは  
安藤哲朗氏「西晋から東晋にかけて」  
小嶋源四郎氏「越王神社の分布について」

◆25日(日) 午後1時  
万葉集と漢文を読む会 万葉集は巻第十四  
「東歌」、漢文は隋書「東夷伝」を読み続け  
ています。

**9月** 1日(日) 午後1時  
発表と懇談の会  
話題提供者とテーマは、  
嶋下武之氏「縄文文化の推移—多摩ニュータ  
ウンの縄文遺跡から—」  
下山昌孝氏「韓国—旧百済国—の遺跡を訪ね  
て」

8日(日) 午後1時半  
山田宗睦先生による「日本書紀講座」  
いよいよ第3年度に入ります。巻第1  
(神代上)を、じっくりと読み進めています。

22日(日) 午後1時半  
万葉集と漢文を読む会  
27日(金)～29日(日)  
越の国(北陸)遺跡巡りの旅

**10月** 8日(日) 午後1時  
発表と懇談の会  
秋原秀三朗氏 特別講演会(題名未定)  
最近「稲と鳥と太陽の道」(大修館書店刊)  
を発表された、民俗学者であり写真家でもあ  
る、秋原氏による特別講演です。